

フットパス整備があたえるまちづくりの効果  
—多摩丘陵の事例—

佐藤舞奈〔東京農業大学 造園科学科 自然環境保全学・観光レクリエーション研究室〕

日本におけるフットパスは、まず自らの暮らす地域において、個性豊かに育まれてきた文化・歴史・産業・景観等の資源を、地域の魅力として再認識・調査することから始まっている。

本研究では、東京都町田市の小野路に位置する多摩丘陵を対象として、フットパスがまちづくりに与える効果のハード面（経済効果・移住者の増加等）は可視化されているが、ソフト面（訪れた人に与える変化や効果・印象等）は明確にされていない。

そこで、アンケート・ヒアリング調査を中心に多摩丘陵小野路のフットパス利用者の属性を視覚化し、レクリエーションの利用状況を明確にすることで、多摩丘陵フットパスが与えたまちづくりの効果を明らかにした。

フットパスの効果としては、地域おこしや居住者の増加、地場産品の売り上げ増加等といった面が取り上げられ、リピーターの心理等は「土地のファンが増えた」の一言で表現されることも多い。

結果としては、歩くためや健康のため、植物の観察といったことに加えて、フットパスそのものが各々の原風景、故郷のような存在になっており、訪れる人と地域がそれぞれに結ばれていることが確認できた。

ネパール・マナスル保全地域におけるトレッキングルートの景観特性と利用実態の把握  
～マナスルサーキットを対象として～

○小倉裕紀〔東京農業大学短期大学部〕・堀澤陽花〔東京農業大学短期大学部〕・  
大澤励〔東京農業大学地域環境科学部〕・波多腰耕弥〔東京農業大学農学部〕・  
下嶋聖〔東京農業大学短期大学部〕・鈴木伸一〔東京農業大学短期大学部〕・  
麻生恵〔東京農業大学地域環境科学部〕

キーワード：ヒマラヤ マナスル 観光 トレッキング GIS 可視領域解析 景観

ネパールは世界に14座ある8,000m峰のうち、8座を有する世界有数の山岳国である。ヒマラヤと呼ばれる高峰は高所登山の対象となり、近年は商業登山（公募制登山）が一般化し、多くの登山者が集まる。一方、山麓一帯は、地域特有の文化や景観を体験できるトレッキングが人気を博している。ヒマラヤはネパールにおける重要な観光資源となっている。

研究対象としたマナスルサーキットは、首都カトマンズから北西約60kmのゴルカ地域の北部に位置するトレッキングルートである。一帯は1998年にマナスル保全地域として指定され、面積は1,663km<sup>2</sup>である。2015年に発生したネパール大地震の震源地に近く、集落やルートも甚大な被害を受けた。

ヒマラヤにおける登山活動や観光利用は、地域経済に潤いをもたらす一方、ゴミの持ち込みや有機物の直接/間接的排出など環境負荷が生じ、加えて急激なインフラ整備やライフスタイルの変化に伴い、地域社会の構造に大きく影響を与える。登山活動や観光による環境へのインパクトを明らかにすることは、持続可能な観光資源管理を検討する上で重要である。

そこで本研究では、ネパール国内有数のトレッキングルートの一つであるマナスルサーキットを対象に、観光利用の増加や観光開発に伴う課題を整理し、景観的側面からみたトレッキング利用上における観光資源の特性を明らかにした。